様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ０２５６０

研究課題名（和文）18世紀イタリア・オペラ台本の女性像に見る社会の変容と作者の創作理念

研究課題名（英文）Social Transformation and the Author's Creative Philosophy in the Image of Women in 18th Century Italian Opera Librettos

研究代表者
大崎　さやの（Osaki, Sayano）

東京藝術大学・音楽学部・講師

研究者番号：８０６４６５１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ゴルドーニのオペラ作品を中心に、18世紀イタリア・オペラ台本の女性登場人物を分析、考察することを通して、そこに表れた社会の変容や作者の創作理念を探るものであった。その成果として、①台本に描かれた女性像に社会の変容と、それに伴う作者の理念の変化が表れていることが分かった。②台本作者が社会の変容を受けた自身の理念だけでなく、上演地や劇場の観客層を考慮に入れて、女性像に反映させていること、上演地や観客層により、描き分けを行っていたことが検証された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学術的には、18世紀のイタリア・オペラ台本に見られる作者の創作理念や社会の変容を探る研究は過去にも存在したが、それらを描かれている女性像を通して探るという手法は類を見ないもので、新たな台本研究の方法を示すことができた。
社会的には、研究期間の最後に参加者百名以上を集めた一般公開のシンポジウムを開催したことで、研究成果を社会に還元することができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to analyze and examine the female characters in 18th-century Italian opera librettos, focusing on Goldoni's operas, in order to explore the social transformation and the author's creative philosophy expressed in them. The results of the study are as follows: (1) The images of women in the operas show the transformation of society and the accompanying change in the author's philosophy. (2) It was verified that the scriptwriter took into account not only his own philosophy in response to social changes, but also the location of the performance and the audience of the theater, and reflected this in the images of women, and that he depicted women differently depending on the location of the performance and the audience.

研究分野：イタリア演劇、イタリア文学

キーワード：18世紀　イタリア　オペラ台本　女性像　創作理念　社会の変容

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

オペラ台本における女性登場人物の扱いに、当時の社会的背景や、オペラ作家の理念や戦略を読み取る研究は従来から存在していた。だが、同じ主題であっても、上演地や観客層の違い、または時代の変遷と共にその姿がどのように変化したかを考察した研究はほぼ見られなかった。また、オペラの台本作家としても活躍したカルロ・ゴルドーニに関しては、彼の喜劇や悲喜劇または悲劇における女性登場人物の研究は P.Trivero が 1993 年にトリノ大学で開催したシンポジウムを元にした論集（AA.VV., *Carlo Goldoni: alla luce della ragione, all'ombra della passione, Atti del Convegno, Torino 8-9 novembre 1993*, Torino, Tirrenia Stampatori, 1996.）や、2008 年にウィスコンシン大学で「ゴルドーニの女性たち」のタイトルで開催されたシンポジウムの論集（≪Problemi di critica goldoniana≫, XVI, 2009, pp.11-114.）を代表的なものとして、すでに多く存在していたが、オペラ台本の女性登場人物の研究は、彼のオペラ台本の研究そのものが遅れたため、進んでいなかった。だが A.L.Bellina を中心とするメンバーが初演版を選定基準とした新たなオペラ台本の批評校訂版を編纂し（WEB 上 http://www.carlogoldoni.it/では 2012 年に全集が完成。書籍では 2007 年以降マルシリオ社から 5 冊が既刊）、緻密なオペラ台本研究を進める土台が築かれた。2007 年にはバルセロナ自治大学でゴルドーニのオペラ台本をテーマとするシンポジウムが開かれ（発表論文は≪Problemi di critica goldoniana≫, XIV, 2009.に採録）、本格的なオペラ台本研究の端緒が開かれた。

２．研究の目的

18 世紀前半、メタスタージオ台本によるオペラ・セーリア（正歌劇）が席巻していたオペラの世界で、新たに生まれたオペラ・ブッファ（喜歌劇）によって人気を得たのがカルロ・ゴルドーニのオペラ台本である。近代イタリア喜劇の父とされるゴルドーニは、その喜劇でさまざまな女性像を描き、そのテーマで数多くの論考が発表されているが、彼のオペラ台本の女性登場人物の研究はほとんどなされていない。また、ゴルドーニ以外の作家においても、そのオペラ台本における女性登場人物に、当時の社会的背景や、作家の理念を読み取る研究は存在していたが、同じテーマ、または女性登場人物を扱った複数の作品で、上演地や観客層の違い、または時代の変遷と共にその姿がどのように変化したかを考察する研究は管見の限り見られなかった。本研究の目的は、ゴルドーニのオペラ作品を中心に、18 世紀イタリア・オペラ台本の女性登場人物を分析、考察することを通して、そこに表れた社会の変容や作者の創作理念を探るものであった。

３．研究の方法

最新の研究成果を視野に入れながら、ゴルドーニや、同じ 18 世紀の作家によるオペラ台本を精読し、女性登場人物を分析した。方法としては、同じテーマ、あるいは同じ女性登場人物を主人公とするさまざまな作家によるオペラ台本を、①オペラが上演された時代、②オペラが上演された土地や劇場の観客層を考慮に入れつつ比較し、それぞれの女性登場人物の描き方に、時代の違いや上演地の文化や思想、観客層の理想像を考慮、影響を受けた上での、作者の創作における理念が表れていないかを探った。また、その際には女性登場人物がその社会的立場、すなわち未婚女性、妻または母といった立場によって、描き分けられていないかも検討した。国内では入手困難な資料もあるため、イタリアでの調査と資料収集を行った。また、学会や研究会等で研究内容を発表して、オペラや演劇、18 世紀を研究する他の専門家の意見も聞き、参考にした。

４．研究成果

研究成果を、研究方法による以下の二つの区分により挙げる。

①女性像の時代による変化

オペラ台本に描かれた女性像の、オペラ上演の時代による違いを検討した。

18 世紀は、啓蒙主義の時代である。そして、王侯貴族が支配するアンシャン・レジームから、中産階級が支配権の獲得に向かっていく時代でもあった。絶対主義の専制君主に好まれた作家メタスタージオの台本の女性登場人物が、アンシャン・レジームの文化の特徴である「抑制と技巧」を体現するものであったのに対し、啓蒙主義時代の新たな感性と共に、真実の自然な表現が芸術にも求められるようになった。そうした社会の変化が、オペラ台本で描かれる女性像にも投影されるようになっていく。例えば、メタスタージオのオペラからは、妻や母といった女性像はほぼ排除されており、女性登場人物はほぼ未婚の若い女性に限られていた。そして、物語の主人公は、一部を除きほぼ男性で、女性は男性にとっての未来の

妻たる恋人としての役割しか与えられていなかった。これはメタスタージオ以外の作家の台本にも共通して見られ、たとえ女性がタイトルロールの台本であっても、実質的に物語を動かすのは男性登場人物で、女性登場人物には、父や未来の夫に従順であること、男性達の意志に従って行動することのみが求められていた。メタスタージオ以外の作家の台本には、妻や母、または社会的身分の低い、乳母や召使いの老女といった女性登場人物も見られたが、もっぱら端役で、彼女たちの行動も物語の筋には影響を与えなかった。ただし、これらの身分の低い女性登場人物は、女主人たちに比べ、自分の置かれた境遇や、男性に対する欲望等を、より露わに表現している。こうした露わな表現を、時代が進むにつれ身分の高い女性登場人物達も行うようになっていく。興味深いのは、時代が下るにつれ、未亡人が女性登場人物として描かれるようになっていった点で、従うべき父も夫も持たず、自由奔放に生きる様が表現されている。こうした描写にも、徐々にアンシャン・レジームを脱していく社会の変容と、それに伴う作者の理念の変化が表れていることが分かった。

②オペラの上演地や劇場の観客層による女性像の変化

同じテーマ、あるいは同じ女性登場人物を扱った場合、上演地や劇場の観客層の違いによって、その描写に違いは生じるのかを検討した。

研究では、エウリピデスの悲劇の主人公アルケスティス（イタリア語でアルチェステ、フランス語でアルセスト）を主人公とするもの、プルタルコスの『英雄伝』に登場するペルシャの王女スタテイラ（イタリア語でスタティーラ）を主人公とするもの、やはりエウリピデスの悲劇の主人公イピゲネイア（イタリア語でイフィジェニーア、フランス語でイフィジェニー、英語でイフィジナイア）を主人公とするものの 3 種類を主に扱った。それぞれ、上演地が、アルケスティスはウィーンとパリ、スタテイラはヴェネツィアとローマ、イピゲネイアはヴェネツィア、ウィーン、パリ、ロンドンの作品を取り上げた。その結果、台本作者は、社会の変容を受けた自身の理念だけでなく、上演地や劇場の観客層を考慮に入れて、女性像に反映させていること、上演地や観客層により、描き分けを行っていたことをことが見て取れた。

以上の研究の成果は、論文や国際学会での口頭発表等を通して公表し、研究期間の最終年度には、「ギリシア悲劇主題の 18 世紀のオペラ－イピゲネイア主題のオペラを起点として」というタイトルの公開シンポジウムをオンラインで主催した。シンポジウムでは、自身のイピゲネイアを女性主人公とするイタリア・オペラ台本についての発表以外にも、フランス、ドイツ、ロシア、イギリスのオペラを専門とする研究者にもイピゲネイアを扱ったオペラを中心に、ギリシア悲劇主題のオペラについて発表してもらった。各地域の専門家との討論や、百名以上集まった参加者との質疑応答を通じ、各地域のオペラの特徴、さらに 18 世紀のオペラ全般に関する知見を深め合うことができた。結果として、今後の日本におけるオペラ研究の発展に寄与できるような、有意義なシンポジウムとなったものと思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 大崎さやの	４．巻 1
２．論文標題 《ポッペーアの戴冠》の解釈をめぐって -ブゼネッロによる地上の生の賛歌-	５．発行年 2018年
３．雑誌名 早稲田オペラ/音楽劇研究	６．最初と最後の頁 5ー21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大崎さやの	４．巻 67
２．論文標題 ルイージ・リッコボーニの『演技術について』――イタリアにおける演技論の伝統を背景に――	５．発行年 2019年
３．雑誌名 演劇学論集	６．最初と最後の頁 109-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18935/jjstr.67.0_109	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大崎さやの	４．巻 44
２．論文標題 ゴルドーニとオペラ・セーリア ーメタスタージオ作品との関係を中心にー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東京藝術大学音楽学部紀要	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大崎さやの	４．巻 1
２．論文標題 《ポッペーアの戴冠》の台本作家ブゼネッロについて　ー歴史上の人物を扱った最初のオペラ作家ー	５．発行年 2018年
３．雑誌名 〈モンテヴェルディ生誕450年記念シンポジウム〉モンテヴェルディのオペラから広がるバロック・オペラの世界 報告書	６．最初と最後の頁 7-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大崎さやの	4．巻 8
2．論文標題 オペラ『アルチェステ』をめぐって ： ヒロインの人物像を中心に	5．発行年 2016年
3．雑誌名 イタリア語イタリア文学	6．最初と最後の頁 49-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大崎さやの	4．巻 394
2．論文標題 トニ・セルヴィッロ演出のゴルドーニ『避暑三部作』	5．発行年 2016年
3．雑誌名 地中海学会月報	6．最初と最後の頁 6-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 大崎さやの
2．発表標題 イピゲネイア主題の18世紀のオペラ台本 －ローマ、ウィーン、ヴェネツィア、ロンドン、パリで上演された台本を例に
3．学会等名 シンポジウム「ギリシア悲劇主題の18世紀のオペラ ーイピゲネイア主題のオペラを起点として」（主催：科学研究費基盤（C）「18世紀のイタリア・オペラ台本の女性像に見られる社会の変容と作者の創作理念」）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Sayano Osaki
2．発表標題 Rethinking Goldoni’s tragicomedy La sposa persiana through comparison with past Venetian theater works
3．学会等名 International Congress on the Enlightenment（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 大崎さやの
２．発表標題 イピゲネイアを主題とする劇の変容 ー１８世紀のイタリアとフランスのオペラ台本を中心にー
３．学会等名 二期会イタリア歌曲研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大崎さやの
２．発表標題 イピゲネイア主題のオペラ台本について －１８世紀のイタリア・オペラとフランス・ オペラの台本を中心に
３．学会等名 早稲田大学オペラ/音楽劇研究所バロックWG研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大崎さやの
２．発表標題 ゴルドーニのオペラ『スタティーラ』をめぐって
３．学会等名 「啓蒙とフィクション」研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 大崎さやの
２．発表標題 《ポッペーアの戴冠》の台本作家ブゼネッロについて　ー歴史上の人物を扱った最初のオペラ作家ー
３．学会等名 〈モンテヴェルディ生誕450年記念シンポジウム〉モンテヴェルディのオペラから広がるバロック・オペラの世界
４．発表年 2017年

１．発表者名 大崎さやの
２．発表標題 イタリアの演劇人とフランス～演劇とオペラにおける文化交流
３．学会等名 知求アカデミーオープンカレッジ（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 大崎さやの
２．発表標題 ゴルドーニとオペラ・セーリア　－メタスタージオ作品との関係を中心に
３．学会等名 日本18世紀学会第38回大会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計3件

１．著者名 山下純照・西洋比較演劇研究会編、大崎さやのほか	４．発行年 2019年
２．出版社 月曜社	５．総ページ数 608（担当：42-49，110-116，124-139，351-366）
３．書名 『西洋演劇論アンソロジー』	

１．著者名 西洋比較演劇研究会編、大崎さやのほか	４．発行年 2020年
２．出版社 論創社	５．総ページ数 784（担当：687－750）
３．書名 『ベスト・プレイズⅡ　西洋古典戯曲13選』	

１．著者名 丸本隆・荻野静男・佐藤英・佐和田敬司・添田里子・長谷川悦朗・東晴美・森佳子編、大崎さやのほか	４．発行年 2017年
２．出版社 アルテスパブリッシング	５．総ページ数 450（担当：252-259）
３．書名 『キーワードで読む　オペラ／音楽劇　研究ハンドブック』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関